

行った業務

- ・ハンディクラフトトレーニングのモニタリングと状況のレポート
(パヤタス: 1/16, 21, 23 エラップ: 1/20, 24, 27)
- ・スタディーツアーへの同行 (1/11, エラップ)
- ・Language exchangeへの参加 (1/21, エラップ)
- ・ミーティングへの参加 (1/21, パヤタス)

学んだこと、感想

私がインターンとしてパヤタスに行き始め、まず感じたのが想像を超えた現地の状況である。事業地に行くまでの道は、行く前からゴミの臭いの存在は認識していたが、他にもジプニーやごみ収集車の排気ガスが非常に酷く、一緒にジプニーに乗っている人々も辛そうにしているのが自分の住んでいるマニラとは異なり印象的だった。インターンを始める前に、通っていた大学の裏にあるスラムに一度行ったことがあったのだが、そこに比べてパヤタスやエラップは道は広く家も敷き詰まって建っているわけではなく、一見暮らしやすそうに見えた。しかしインターンの2日目、スタディーツアー中に行われたfamily interviewで2軒の家にお邪魔させていただいたが、家の中の見た目や彼らの生活状況から、決して容易な生活をしているわけではないことを知った。貧困が直接的な理由ではなかったものの、初めて何人も目の学校に行っていない子どもたちを目の当たりにして非常に驚いたのを覚えている。現地に行くまでは、アフリカや南アジアの国々に比べれば就学率や教育の質が高いと感じていたフィリピンで、なぜフリースクールが必要なのか、と疑問に思っていたが、現地に行ってみるとPaaralang Pantaoがコミュニティ内の子どもたちに活着しているのを強く感じた。

続いて、私はインターンにおいて主にハンディクラフトのモニタリングに関わっていたが、そこで感じたのが思い通りにプロジェクトを進めることの難しさである。まず、現地に初めて行った日にエラップのお母さんたちから活動における問題点を伺った。昨年行っていたNGOのインターンから、事業におけるモニタリングの重要性は重々感じていたが、事業を行う側が裨益者のモニタリングをしても、裨益者の間で問題が起こりうることを知った。この日にモニタリングの際に気をつけて観察すべきことを学び、気が引き締まったが、実際にモニタリングに行ってみると中々自分の思い通りにはいかなかった。例えば、お母さんたちが何をしているのか観察することは簡単だったが、それらの行動に疑問が浮かび上がっても、中々質問することができなかった。週末のミーティングで、はるかさんからお母さんたちとコミュニケーションを取るポイントを教えていただいたおかげで、その次にあったモニタリングで話しかけることはできたが、やはりお母さんたちに自分の思うように質問に答えてもらうことはできなかった。現地の人々とのコミュニケーションには、言語の違いだけではなく、話しかけ方も注意しなければならないのだと思った。インターン最終日はタガログ語が分かるKevinさんとエラップに行ったおかげで、お母さんたち同士の会話やお母さんたちが私たちにタガログ語で言ったことを訳してもらえた。私もタガログ語が理解できたらもっとコミュニケーションが取れていたのになあ、と最終日は特に感じたが、来た当初よりはお母さんたちと近くなれたと感じたし、モニタリングで気をつけるべきことを学べたと感じている。

たった3週間のインターンでも、もっとハンディクラフトのお母さんたちと近くなりたかった、もっと話をしたかった、などと後悔が残っているが、少しの間だけでも実際に現地に行くインターンをさせていただいたおかげで、これから国際協力で携わる際に生きるような点を知ることができた。インターンで得たことを忘れずに、これから国際協力の場で悩んだ際に「パヤタスではこんな状況だったな」とか「パヤタスのお母さんたちとのコミュニケーションではこうしなきゃ、と考えていたな」と思い出せたら良いなと思う。